

パネル発表

「相模女子大学小学部の動物飼育の実践と子どもへの影響」

三橋 正英



1 相模女子大学小学部の動物飼育について

相模女子大学小学部では、平成4年（1991年）より山羊の継続飼育を続けている。モルモットの飼育は平成26年（2014年）1月末から始めた。

小動物の飼育種については、担任と子どもたちが学級で話し合っただけで、以前はハムスターやウズラなどが飼育されてきた。

私が1年生を担当した夏、飼育していたウズラが寿命をむかえ、新たに何を飼うか決めることになった。子どもたちとの話し合いとともに、獣医師の協力を得て、モルモットの飼育をスタートした。

現在、モルモットの飼育は、1年生の2学期から始め、2年生の2学期までしている。

1年生各学級で一匹ずつ、約1年間飼育し、2年生の2学期に引き継ぎ会を開いて、次の1年生に引き継ぐ。学年をまたぐが、1年間は飼育を続けたほうがよいと判断したこと、1年生が学校生活にある程度慣れてから小動物飼育を導入したほうがよいと考えてのこと

である。山羊は、2年生が春休みから世話をし、3学期に次の学年に引き継ぎをしている。

2 触れ合える動物飼育の必要性

1年生が小動物を飼育する以前も、教室には、いつもたくさんの生き物がいたが、いずれも水槽で飼育する小さな生き物だった。

子どもたちは、オタマジャクシがカエルになるまでの成長やダンゴ虫の赤ちゃんの誕生を観察するなどして、生命の営みの巧みさに興味・関心を高め、感動していた。水槽での小さな生き物の飼育は、生物に対する興味関心を高め、自然の営みを見つめる観察力つけ、飼育の基本を学ぶ入口になった。しかし、子どもの心のうちにより強く働きかけ、命を実感し、命あるものを大切にしようとする心情や思いやりの心情を育むには、もう一步踏み込んだ飼育の必要性を感じた。直接触れ合うことを通して、ぬくもりを感じ、感情のやり取りができる動物種の飼育である。抱っこしたり、撫でたりできる小動物の飼育は、子どもたちの求めるものでもあった。

3 モルモットの飼育を通して見られた子どもの姿

実際に教室で、飼育を始めると、一匹のモルモットが多様な学びの機会を与えてくれた。まず、調べ学習が充実した。飼育に当たり、図鑑やインターネットで調べたり、ペットショップでモルモットの飼い方や性格を聞いたりして情報をあつめ、報告し合った。お世話がはじまると、調べた事柄と事実が結びついて「図鑑に書かれていることはこういうことだったんだ。」と理解を深めたり、書かれている事実と異なることを見出しては、なぜだろうとさらに追究する姿があり、本や図鑑と飼育観察を行ったり来たりしながら認識を深めていた。

飼育をスタートして最も大きく変化したことは、モルモットを通して、子ども同士、子どもと教師・保護者との間に新しいコミュニ

ケーションが生まれ、活性化したことである。どのような学びがあったか、下記に紹介する。

(1) 命と触れ合う喜びを知り、大切に思う気持ちをふくらませる子どもたち



モルモットがやさしく撫でられ、目を閉じて気持ちよさそうな鳴き声を出したり、伸びをし

たりすると、子どもたちは自ずと笑顔になる。いとおしそうにいつまでも撫でていた。毎朝8時には、モルモットと触れ合う姿があった。

ニンジン初めて与えるときも、モルモットの目の前でまず、自分がニンジンを食べて見せてから、与える子がいた。自分がニンジンを食べて見せることで、安全な食べ物であることを教えたかったらしい。偶然にもモルモットがニンジンを食べるようになったので、気持ちが通じた思いで満足感をえていた。

身をゆだねられることや気持ちが通じる思いが、喜びとなり一層触れ合いたいという欲求や大切にしたい気持ちを育んでいた。

あのね、モルモットを飼うのが楽しみだよ。ただ、さわるだけじゃなくて、エサをやったりお世話もしたいなと思います。木曜日にくるから、水曜日の夜、眠れないかもしれません。お家で、ペットを飼ったことがないので、早く木曜日になってほしいなと思います。私は、モルモットは、大好きです。だから、みんなで育てたいなと思います。(Kさん)

今日、一年一組にモルモットが来ました。私たちは、モルモットが気持ちよく過ごせるように、お家を造りました。体は、白くて、目は赤かったです。大きさは、私の掌より小さかったです。だから、すごくかわいかったです。モルモットを触ってみると、毛がふわふわしていて、あったたかかったです。気持ちよかったです。ずっとだっこをしていたかったです。だから、明日から、みんなでエサやりをしたいです。(Sさん)

学級飼育をして一番心に残った出来事は、動物が苦手な児童がモルモットと触れ合うようになったことである。今年の9月、2年生から1年生へのモルモットの引き継ぎ会を実施した。ふれあい体験コーナーで、1年生女兒の一人がモルモットに全く触れることができなかつた。その子に、少しでも触れてみるように働きかけると、ようやく人差し指の先でモルモットの毛を触った。しかし、直後に指を体操着で拭い、泣き出してしまった。予想がつかない動きをする動物に強い不安を抱いていたようである。1年生教室でモルモットのお世話が始めると、女兒はモルモット直接接触することのない仕事をしばらく続けていた。そして、一月ほどたったある日、「モルモット、抱っこできるようになったよ。」と教えてくれた。クラスの仲間と一緒に飼育するなかで、少しずつ慣れて触れ合うことができるようになったのである。内面的な成長を大きく感じる出来事であった。

(2) 相手の気持ちを考えて関わろうとする子ども



飼育当初は、力加減がわからず、強く撫でたり、抱きしめたりして、モルモットが悲鳴をあげることがあつた。

また、しつこくかまひすぎて、噛まれることもあつた。そんな時、飼育経験のある子や生き物好きの子が、「強すぎじゃない。」「もう20分もかまひているから、疲れているよ。小屋に戻してあげようよ。」と声をかけていた。次第にモルモットの反応から気持ちを考え、ふれあいの時間を意識したり、やさしくなであげたりするようになった。人の気持ちを汲み取ることが苦手な児童が、モルモットと仲良くなろうと友達の声に耳を傾け、試行錯誤しながらかかわる姿があつた。



(3) 行動観察から気持ちを考えることや習性をとらえようとする子どもたち



モルモットのシロンは、エサ入れをトイレにする。小雪やシフォンは、お掃除の後、必ず決まった場所におしっこをする。そこが汚れてくると、まだきれいなところにする。子どもたちは、観察を通してこの事実を見つけ、「モルモットは、トイレをおぼえないのではなく、トイレが汚れているからそこにできなくて、ほかの場所に行っているんだよ。僕たちだって汚れているトイレはつかいたくないもの。」と結論を出していた。「餌袋を開ける音を聞くと必ず鳴くね。餌をもらえることがわかるんだね。」と行動から気持ちがわかることをとらえた子どもたちは、モルモットが気持ちを伝えるために鳴き声を変えていることを見つけた。そして、4種類の鳴き方とその時の気持ちを関係づけた。

【モルモットの気持ちの表し方について】

なきごえでつたえる

「グルグル」…こわいよ。

「ルルルル」…きもちいいな。うれしいな。

「プイプイプイ！」…それ、ほしい。

「キューーキューー」…

すごくいいことがあったよ。

すごく悪い(怖い)ことがあったよ。

それぞれのモルモットで鳴き方は、少しずつちがうよ。

からだであらわす

ぺろぺろなめる…たのしい。うれしい。

ずつきをする…いやだよ。

ふれあっているとき体を伸ばす…もっとなでて

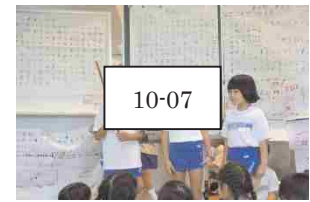
(4) 積極的に発信する子どもたち



飼育に慣れてきた子どもたちは、先生方を教室に招き入れて、自分たちのモルモットについて好きな食べ

物やふれあい方を教えるようになった。

また、全校朝会でモルモット紹介をしたり、1年生歓迎会やモルモット引き継ぎ会でクイズ形式にして発表したりする活動ができた。



児童のモルモット紹介文章①

「1くみのモルモットの名前は、「小ゆき」です。まっ白でおまんじゅうみたいに丸くなると、とてもかわいい女の子です。目は赤で、耳はうすいです。1年生が持っている3びきの中で、一ばんちいさいけれど、はしりまわったり、のびをしたり元気な子です。モルモットはあまりトイレをおぼえないといわれていますが、トイレもおぼえるかしこい子です。でも、トイレがきたなくなると、ほかのところにもします。きれいなところがすきなんだとおもいます。なでるとよるこんで鳴きます。くいしんぼうで、ふくろをあけるおとがするだけでも鳴きます。また、2くみや3くみのモルモットがそばにくるとないてよびつつけるのでさみしがりやなのかなとおもいました。とくにすきなたべものは、ぼく草とチモシーとキャベツです。よくたべるのでうんちやおしっこもたくさんします。

児童のモルモット紹介文章②

「1年2くみのモルモットの名まえはシロンです。シロンと名まえがついたのは、白くてまんまるくてころんとしているからです。シロンは、耳のけっかんがえだわかれしているのがみわけのこつです。シロンは、ようじんぶかくて、さいしょ手わたしのやさいはたべませんでした。でもいまでは、2くみのみんなになれてきて手わたしのえさをうれしそうにたべています。3びきの中で、一ばんふとっていて、体じゅうが一ばんおもいです。」

(5) 交流を広げ、深める子どもたち



モルモットのお世話の仕方がわからず、困っている子に、付き添って教える姿が日々みられるようになった。また、モルモットと触れ合いた

くて、子どもたちが膝を突き合わせるようになった。口数の少ない児童が生き物好きの仲間の輪の中に入り、交流する姿があった。動物に触れたことのない児童も友達に連れられ、触れ合いに参加し、動物への抵抗を和らげる場面があった。上級生や先生方も昼休みに教室を訪れるようになり、異学年交流もさかんになった。また、

当時、6年生で、落ち着きがなかったクラスが、モルモットの飼育を始めた。モルモットの飼育を通して対話もうまれてか、

クラスは次第に落ち着いていった。担任は、「モルモットの飼育が、クラスが変化するきっかけになったのかな。」と話していた。

(6) 責任感をもって取り組む子どもたち

飼育が始まると、おしっこやふんで汚れた新聞紙を片づけ、床をふき取ることに子ども

たちは抵抗を示した。しかし、いつまでも元気でいてほしいという願いから、気持ちを乗り越え、いつしか当たり前のようにお世話をするようになった。先に記した6年生は、自らモルモットのお世話チェックシートを作成して、お世話の際に記録残すようにしていた。

(7) 仲間を大切に思う気持ちを行動にうつす子どもたち

モルモット当番をさける児童もいた。その児童に対し、「家で動物を飼えない友達にとって、モルモット飼育は、大変な喜びであること」「アレルギーの人は、不安を抱えているけど、みんなのために協力してくれている」ことを伝えた。モルモットのお世話をしっかりすることは、友達の願いをかなえ、健康に不安のある人が、安心して学校にこられることにつながっていることを伝えた。それから、その児童たちは、お世話を忘れることなく、かつ率先して取り組むようになった。



モルモット当番をさける児童もいた。その児童に対し、「家で動物を飼えない友達にとって、モルモット飼育は、大変な喜びであること」「アレルギーの人は、不安を抱えているけど、みんなのために協力してくれている」ことを伝えた。モルモットのお世話をしっかりすることは、友達の願いをかなえ、健康に不安のある人が、安心して学校にこられることにつながっていることを伝えた。それから、その児童たちは、お世話を忘れることなく、かつ率先して取り組むようになった。

(8) ソーシャルスキル育成の機会を得る

お世話は、一週間交代の飼育当番制で行った。すると、放課後のお世話が用事でできないときがある。そのときに、黙って帰ってしまう児童が多くあった。そこで、お世話ができない場面をとりあげ、「お願いの仕方や断り方」の学習をした。また、水飲みを洗っているときに滑らせてしまった児童は、仲間と協力して木工用ボンドで修理をしていた。そのあと、協力してくれた仲間にお礼を言い、こわしてしまったことを担任に報告して謝ることができた。飼育活動の中では、さまざまな出来事がおこる。どのような場面でお礼を伝えたり、謝る言葉を伝えたりするのか、どうつたえるのか、具体的な場面でソーシャルスキルを身に着ける機会が多く得られた。

(9) 家でも動物飼育にチャレンジ！！

学校での動物飼育に対して、学校休業日は、協力してくださる保護者、希望される保護者に、ご家庭に持ち帰って面倒を見ていただいた。命の本質を理解するには、実際に命に触れ合うことが欠かせない。

保護者 A

夏休みに引き取り、貴重な経験をしたと思います。最初はかわいいなという感じでなでたり、見ただけでしたが、2日位たつと、自分から小屋をきれいにしたり、餌をあげたり元気がどうか気にしたり、私もびっくりするほど気にかけてあげられるようになりました。一人娘なので、自分勝手にわがままになるのを心配しておりますが、短期間でしたが、家でお世話することにより、生長を感じることができました。

保護者 B

家族の一員として接することができ、とても愛着がわき、小雪ちゃんに会いたいです。子供も責任を持って毎日のえさやり、そうじなど自分から進んでお世話することができてよかったです。

保護者 C

動物を飼うことは初心者でしたが、一人子どもが増えてみたいで楽しかったです。アニカ飼ってみたいなど思いました。本人よりも下の子がお世話の楽しさに目覚めました。ダンボールの掃除のやり方もどうやったらモルモットが素直に外に出てくれるか素早く片づけられるかなど工夫していて子どもなりにいろいろ考えていました。

一方で、動物飼育の大切さを感じながらも住居環境の問題や保護者が共働きされているなどの事情から、動物飼育ができないご家庭が多くあった。そのようなご家庭にとって、学校での動物飼育に対する期待は大きいものであった。さらに、週末や長期休業中、短期間持ち帰ってお世話するシステムは、家で動物飼育してみたいという願いに応える機会となった。本校では、学級飼育をスタートする前の父母会時に、獣医師の協力を得て1時間程度のふれあい教室を開催することで、子どもと一緒に世話してみようというご家庭の協力につながっている。

(10) 死別体験を通して命を見つめる子どもたち

平成26年9月2日、12年間飼育してきた山羊のミルクが寿命をむかえた。子どもたちと、おくり方を話し合い、お別れ会を行った。火葬したのち、遺骨は校内の桜の木の根元に埋めた。

しばらく、ミルクがいた小屋を訪れては話しかける児童が後を絶たなかった。担任は、

ミルクへの手紙

いままでずっとミルクといられて楽しかったよ。いつもミルクはメーメーと泣きながらあいさつをしてくれたよね。あの時は、とてもうれしかったです。2年生になって小屋の掃除やミルクバザー、小屋のリフォームもしました。とてもよろこんでくれて、わたしもがんばろうと思いました。そんなやさしいミルクと今日でおわかれになってしまいました。天国へいっても私たちのことをわすれないでください。そして、いままで笑顔をくれたミルクに「ありがとう！」(4年女児A)

ミルク、わたしは1年のころまだミルクのことはしらなかった。でも、2年になってミルクのことがわかった。あと、ごはん中にさわいだりしてごめんね。いつも私がおはようっていうと、おはようっていつてくれたり、二人でささあえあったりしたよね。ミルク、天国でもがんばってね。私は、いつもミルクを見守ってみているよ。いろんなことがあったけど、いつも本当にありがとうございました。(4年女児B)

子どもたちの気持ちが落ち着くまで見守った。死も生命の営みの一つであることを理解する機会となった。また、残されたものが、死と向き合い、受け入れ、先に進むことを学ぶ機会になった。



4 おわりに

モルモットを導入するに当たり、動物アレルギーのある児童への対応や飼育動物が病気になった時の対応など不安を抱えていることを正直に伝えてくれる方たちがいらした。公衆衛生の専門家である獣医師の力を借りて、その不安の一つひとつを教師、保護者全体へ丁寧に説明することで飼育を始めることができた。飼育をスタートすると、人の交流が盛んになり、学校全体が活気だった。小さな命が学校全体の雰囲気を変えた時のことを今でも鮮明に覚えている。

教室での動物飼育は、同僚教師、保護者の理解と協力に加え、獣医師の協力があって安心してできる。飼育に伴う課題に対しては、その都度、担任間で情報交換し、必要に応じて獣医師に相談するなどして、常によりよいあり方を考え、進めている。

(学校法人相模女子大学小学部)